■平成22年度 新潟県立大学 公開講座「とっておきの新潟学」

新潟県の歴史と文化

魚沼・頸城地方の山間部の豪雪地帯、佐渡という大きな島嶼、日本海の長い海岸線、信濃川と阿賀野川の二つの大河が作りだした蒲原平野、そしてさらに日本列島の地殻を二分する中央構造線など自然的条件の制約を受けながら、新潟県は古くから地域固有の歴史風土を創り上げてきた。今回は村上・岩船地域に的を絞り、そこに育まれた言語文化・食文化・歴史性などに関する知識を深め、受講生に今後の地域づくりを考えてもらう。

村上・岩船再発見

会場 村上市教育情報センター 村上市田端町4-25

日 時 平成22年10月9日 13:30～16:30

後 援 村上市教育委員会

参加者 36名

プログラムおよび講師

1 ことばと文化

新潟県地名研究会 会長 長谷川 勲

2 風土と食

県立新潟女子短期大学 名誉教授 本間 伸夫

3 郷土意識の形成

新潟県立大学 国際地域学部 教授 板垣 俊一

●「意見交換 ―村上・岩船の再発見に向けて―」

講演者3氏、フロアーとともに

新潟県立大学 国際地域学部 教授 福嶋 秩子

新潟県立大学 人間生活学部 教授 佐藤恵美子

講師紹介

長谷川 勲 (はせがわ いさお)

新潟県地名研究会 会長

新潟県ことばの会会員
新潟日報に「にいがた地名考」を連載
近刊予定『越後磐舟ことば辞典』(仮称) を編集

板垣 俊一 (いたがき しゅんいち)

新潟県立大学 国際地域学部 教授・新潟県立大学図書館長

略歴：旧山北町出身　東京都立大学大学院博士課程満期退学
専門分野：日本古代文学・民俗芸能研究(ごぜ・歌謡)
現在の研究テーマ：中国民間歌謡の調査・研究
編著書：『前太平記』(1988)
『新潟県の地域と文化ー地域を学ぶためにー』(2006)
『越後瞽女唄集ー研究と資料ー』(2009)等

司会兼コーディネーター

木佐木 哲朗 (きさき てつろう)

新潟県立大学 国際地域学部 教授

専門分野：文化人類学
県立新潟女子短期大学助教授・教授を経て、2009年4月より現職

本間 伸夫 (ほんま のぶお)

県立新潟女子短期大学 名誉教授・農学博士

専門分野：食文化論
著書：『日本の食生活全集 聞き書・新潟の食事』(1985)
『食は新潟にあり』(2008)

コメンテーター

福嶋 秩子 (ふくしま ちつこ)

新潟県立大学 国際地域学部 教授・国際地域学部長

略歴：広島市出身　東京大学大学院博士課程満期退学
専門分野：言語学、英語教育

佐藤 恵美子 (さとう えみこ)

新潟県立大学 人間生活学部 教授 博士(農学)、管理栄養士

専門分野：調理科学(実験、実習Ⅰ Ⅱ、食文化)
略歴：山形県(庄内)出身、新潟大学教育学部卒業後国立栄養研究所研修、香川大学農学部研修
著書：『ゴマ豆腐の調製条件に関する食文化的考察』(日本食生活文化財団報告集27)(2010. 11)
『新潟県の地域と文化ー行事食』県代表責任者(日本調理科学会共同研究報告集)(2011.3)
『新潟の伝統ご飯』新潟日報社(2008)、『ゴマ豆腐の食感とレオロジー』論文14編(1995～2011)

企画趣旨説明

コーディネーター：木佐木 哲朗

私は今回、新潟県の歴史と文化ということで、特に「村上・岩船再発見」というタイトルを付させていただきました。ちょっと余計なことかもしれませんけれども、私は生まれてから高校卒業まで鹿児島におりました。要するに鹿児島で生まれて育ったんですけれども18年おりました。その後、大学から東京に参りまして東京に17年おりました。それで新潟に来て、今年で18年目になります。３分の１ぐらいずつ各地にと言いますか、異なる地域で生活をしてまいりました。

私も地域を出るまでは、なかなか地元のことはごく当たり前の風景であったり、当たり前の習慣ですので、考えたこともついありませんでした。しかし一歩出ると言いますか、それこそ私は文化人類学という学問を専攻して、主にフィリピンを研究しておりますが、日本を出ると、日本を考えるということになるのかもしれませんけれども。そういう中で、やっぱり一歩外に出ると、思い浮かぶ風景というものがあって、あるいは思い浮かぶ人々というのがあって、やっぱり地域を知ることの重要性と言うか、学ぶことの必要性を痛感します。自分の住んでいる世界と言うか地域を知るということがとても大事なことではないかと思っているわけです。そんなことで、何が分かるかというのは、自分を再認識することでもありますし、どんどん均質化している世界ですけれども、でもしかしやっぱり風土に根ざしたものというのは、きっと変わらない部分があるというのは明白なことだと思っているわけです。

そういう中で、日本の中の新潟という位置づけがまずあると思うんですけれども、その新潟の中で、いわゆる一般的には下越、中越、上越、佐渡と四つに分けて言われます。その中で、ずっと私はいわば下越の蒲原なんですが、ときたまこちらのほうに伺う機会があったりしたときに、新潟、いわゆる蒲原とは違う、やっぱり岩船という特性というのがまず、間違いなくあると思うわけです。

そこで今日、村上・岩船とさせて頂いたのは、いわゆる旧村上市だけではなくて、朝日、山北、神林、荒川ですとかを含む、最近合併した村上市。加えていわゆる旧岩船、今も岩船ですが関川村あるいは粟島浦というところまでを括って、それで村上・岩船という形にさせて頂きました。もちろん、「村上・岩船再発見」ということで言いますと、いろいろなアプローチの仕方があるわけですけれども、今回は、長谷川先生のほうから「言葉と文化」、本間先生のほうから「風土と食」、３番目に板垣先生のほうから「村上市の郷土意識の形成」というようなことで、お話をいただきます。その後皆さんフロアとわれわれとで、何か新しい発見のきっかけでもつかめればいいかな、というようなことを考えて企画させていただきました。

1 ことばと文化

講師：長谷川 勲

地元の長谷川です。「ことばと文化」についてお話しします。ここで「ことば」と言いますのは昭和20年代までの岩船郡の方言、現在の村上市・岩船郡の方言です。少しややこしいので、これを“磐舟ことば”と呼びたいと思いますが、よろしくお願いします。時代的には昭和30年（1955年）頃までに使われていた「ことば」が本講座の対象です。

まず歴史を感じる語彙をいくつかお話してみましょう。

最初は自称の「わ（吾）」です。共通語の「われ」「わし」などのもとになっている「わ」で『古事記』にも出てくる語です。これが“磐舟ことば”として存在します。対する相手をいう「な（汝）」もあります。多く「ンな」となっていますが、ンは発音に付随して出る音で「な」です。これも『古事記』に用例が見られますが、厳然と残っております。

衣食住を見てみましょう。まず「いと（糸）」です。これは「麻糸」のことです。この地域、糸には「ふじ（藤）糸」「しな（科）糸」「かな（綿）糸」「すが（絹）糸」いろいろありますが、たんに「いと」といえば「麻糸」なのです。『古事記』中巻に「糸の徒（まにま）に尋ねて行けば、美和山に至りて、神の社に留まりき」とありますが、この「糸」は「麻糸」のことです。また、糸をはた（機）にあげて織れば「ぬの」になります。布には、これも「ふじ布」「しな布」「絹」「木綿」とありますが、“磐舟ことば”の「ぬの」は「麻布」です。『万葉集』の「たなばたの五百機（いほはた）立てて織る布の…」の「布」は「麻・葛などの繊維で織った織物」と広辞苑は載せています。「麻」は糸・衣料の中心でした。

次は食です。村上の食といえば、どなたも「鮭」を挙げられるのではと思います。“磐舟ことば”ではこの魚をサケとかシャケとは呼びません。「いお」または「いおぼや」です。ボヤは魚のことでイオボヤは「鮭という魚」の意です。ところで平安時代の『和名抄』には「魚:和名宇乎（うを）、俗に云う伊遠（いを）」とあり、魚を一般に「いを（お）」と言っていたことが分かります。その魚をいう「いお」が“磐舟ことば”では「鮭」なのです。これは日本人

が「花」といえば「桜」を指すのと同じように、村上では「うお」といえば「鮭」、つまり魚類の中心に鮭を置いていたことが分かります。

次は住、信仰ともかかわりますが神棚です。神棚は通常一家に２つあります。１つを「だいじくさま」他を「えべさま」と呼びます。ダイジクサマは大神宮様で、天照皇太神宮。大きく立派で居間の座敷側（上手）に祀られます。エベサマは恵比寿様。小さく質素な神棚で、居間の土間側（下手）にあります。ダイジクサマには特に祭日はありませんが、エベサマには祭日があるばかりか、祭神も恵比寿のほか大黒（大国）・山の神・田の神とあり、その神ごとに祭日も供え物もそれぞれ決まっています。農・漁・商、なりわいの大切な祭祀は全部この神棚に行われます。なぜでしょう。これは推察の域を出ませんが、古く神棚はこのエベサマだけだったのではないか。恵比寿は「えみし（蝦夷）」で土俗系、国津神系です。対して大神宮（天照大神）は天津神系、その最高神です。遠い昔、エミシ系の人々（縄文人）のこの国に、渡来人（弥生人）がやって来てこれを征服していったように、いつの頃かダイジクサマが各家に浸入し、エベサマを片隅に追いやったのではないか。そんな気がしてならないのです。そして、それを仕掛けたのは誰か、今そんなことを考えています。

最後はひにち（日日）についてです。私たちは今、１日を午前０時から次の午前０時までとしています。ところが昔の人はそんなことは考えませんでした。たとえば、３日と言えばすむのに、「三日三晩」といい、一週間を「七日七夜」などという。これは１日は朝から夕方まで、夕方から次の朝までを１夜と考えていた証拠だと思われます。平安時代の紀貫之の『土佐日記』に「ひひとひ風やまず」とか「よひとよとかく遊ぶやうにて明けにけり」のように「ひひとひ（日一日）」「よひとよ（夜一夜）」が見えます。ところが“磐舟ことば”には、これが「ひひて」「よっぴで」と少し転訛はしていますが残っています。「わ」「な」「いお」「ひひて」「よっぴで」、これらの語たちの遥かな旅路、歴史の遠い細道を考えた時、よくぞこの地に残っていてくれたと、感じ入るばかりです。

発音に移ります。「い」と「え」の混同は越後全域にみられますが、当地も同様です。「し」と「す」、「ち」と「つ」も１つになり「し・す・ち・つ」は、多く「す・す・つ・つ」となります。それで「じ・ず・ぢ・づ」は、「ず・ず・ず・ず」となり、ズーズー弁です。この対策として、各小学校には国語教育史にも希有な「発音矯正」の時間がありました。全校生徒が「し・す・ち・つ」の黒板を前に、先生の指導で発音練習をし、成果を上げたのです。

共通語の「せ」は「しぇ」や「へ」になります。煎餅は「しぇんべい」になる所と「へんべい」になる所があります。「へ」は村上町周辺、「しぇ」はその外縁部です。

頭音以外の「カ行」「タ行」は濁音化します。「かめ（亀）」や「たる（樽）」は濁らないが、「さか（坂）」「うた（歌）」などは「さが」「うだ」となる。東北地方と同じです。

鼻音は濁音を鼻にかける発音ですが、これがあります。頭音以外の［b］［d］音の前には必ず軽く［n］が入ります。これを「~」と表記しますと、膝（－dza）・肘（－dzi）・肌（－da）・袖（－de）・側（－ba）・錆（－bi）・鍋（－be）は、それぞれ「ひ~ざ」「ひ~じ」「は~だ」「そ~で」「そ~ば」「さ~び」「な~べ」となります。

鼻濁音は鼻に抜いて発音されるガ行音ですが、これを「カ゛キ゛ク゛ケ゛コ゛」のように表記しますと、怪我（－ga）・杉（－gi）・棘（－ge）・河豚（－gu）・手篭（－go）などは、「けか゛」「すき゛」「とけ゛」「ふく゛」「てこ゛」のようになります。鼻濁音は山北地方にあり、他の鼻音をもつ地域では鼻濁音とはならず、鼻音を用います。

鼻音・鼻濁音には、隠れた効用があります。たとえば「まと（的）」は“磐舟ことば”では「まど」です。すると「まど（窓）」との区別はどうなるの、となりますが心配はいりません。「窓」は「ま~ど」と鼻音を挟むのです。「かき（柿）」と「かぎ（鍵）」も心配いりません。「かぎ」「か~ぎ」と言い分けますから。

“磐舟ことば”には鼻音・鼻濁音のほかにも歴史的な発言「くゎ（kwa）」や「ふぁ（Fa）」行音が残ります。「菓子」「火事」は「くゎし」「くゎじ」ですし、葉・歯・日・火は「ふぁ」「ふぁ」「ひぃ」「ひぃ」と発音します。さらに兵隊を「ふぇーたい」、ほごすを「ふぉごす」という、なども採集されています。

四段動詞（文語）の連用形「買ひて」「笑ひて」などは「買うて」「笑うて」のようにウ音便を用います。また形容詞（口語）の連用形「長くて」「高くて」なども「長うて」「高うて」となります。共通語とは異なって関西系の発音です。

アクセントは「あせ（汗）」など、尾高になりますが、基本的には「東京式」。文法では形容詞・形容動詞の終止形・連体形・仮定形が同形、一段活用動詞では仮定形・命令形が同形となるなど、共通語と異なります。時間になりました。これで終わります。

2 村上・岩船の風土と食

講師：本間 伸夫

最初に取り上げる地域は、かって村上町がその構成員であった旧岩船郡、現在の村上市、関川村、粟島浦村であり、それらをまとめて岩船と表現することにする。

一般に、地域の風土と食、両者の関係には、図１に示すような関係が存在しているものと考えられる。

これは、ある地域の食の伝統や文化が、自然風土によってほぼ決定されることを示している。なぜならば、食の在り方に直接的に関与しているのが使える食料の質と量であり、その食料の生産を強く規制するのが、その地の自然風土であることによる。加えて、人間風土の影響も加わっている。いずれにしても、重要なのは、その地がいかなる自然風土であるか、ということに尽きる。

まず、新潟県の風土を食から見ると、日本海側にあって、冬季降雪多く、夏季高温、平地多く、水に恵まれ、特に稲作に適することは周知の通りである。本州最北端の大間岬、南端潮岬の中間である北緯37.5度線が県の中央、長岡と三条の中間を横断することは、南方系の作物、北方系の魚介類というように、食の生産獲得に南北両様の可能性があることをを示している。

自然風土から見た岩船は、南側にある平野は越後平野の北側に繋がるものであるが狭くなり、山地、里山、平野、川、海、島がバランスよくまとまっている。山紫水明の地といわれる所以であろう。人間風土という点からすると、南方の蒲原だけでなく、出羽街道、米沢街道、北前航路などによる隣接する山形・庄内や置賜との交流の影響も大きい。また、村上藩の存在もまた重要であった。以上の如く、変化に富む自然風土と人間風土に起因して、岩船の食の生産、伝統、文化は、県内他地域と比較すると、かなり変化に富んでいるといえる。以下、用いた映像（パワーポイント）から選んで、タイトルを示し、この地区の個性的かつ多様な食を紹介する。

① **自然風土**（気候と地勢）
↓
② 食料の生産・流通（農林水産業など）
↓
③ 繰り返される地域の食生活 → ⑤ **食の伝統・食文化**
↑
④ 人間風土（社会体制、宗教、文化など）

図１　地域の風土と食の関係

図２　飯ずし

・新潟県の食風土的位置　―日本の中の新潟県―

・新潟県の食文化による地域区分地図　―新潟県の中の岩船―

岩船は一つの地域としてまとまっているが、山北はやや特異的である。東北地方に近い位置にある。

・村上・岩船　―山紫水明・豊穣・山形との架け橋の地―

岩船の食の特徴を一口で表現すると、山紫水明で表現される地勢から生まれる多様で豊かな食に加えて山形との深い因縁の存在、である。

・雪は融けて里山と平野を潤す　―なぜ、新潟ではコシヒカリが里山でもよくできるのか―

岩船米は高く格付けされているのは、高い山が近いせいであろう。

・飯ずし　―北部日本海岸の食文化―

冬の岩船を代表する伝統的な食べ物の一つ。野菜と鮭鱒、米麹、米飯などで作る鮨漬け一種であって、正月のご馳走となる。日本海沿岸北部で似たものが伝承されている。（図２参照）

・あく巻き　―山形県・庄内との交流―

灰汁に浸漬した糯米を笹葉で三角形に包んでから加熱した三角粽の一種で、米は淡黄色となる。灰汁に漬けない白い三角粽は、新潟県を含めた東日本の日本海側に広範囲に分布しているが、あく巻きは庄内と新潟県の北端山北地区にのみ伝承されている。食文化の伝播という意味で興味深い事例である。

・のっぺと大海　―新潟の代表的な郷土料

理―

のっぺは新潟県越後の代表的な郷土料理であり、それを村上では「大海」という立派な容器に入れて饗する。

・多彩な名を持つ紅色食用菊　―新潟と山形でのみ食用―

下越では「かきのもと」、中越では「おもいのほか」または「もってのほか」と呼ぶのに対して、山北では「かきのもと」または「もってのほか」、山形県では「もってのほか」であるのが面白い。

・北限の茶処・村上　―照葉樹林文化の代表、茶樹と喫茶―

照葉樹の茶樹は積雪地での栽培はかなり困難なはずだが、樹高を低くし雪の下で越冬させるなどの技術でもって冬の寒さに対処している。マイルドで甘いのが特徴であり、紅茶も造られている。

・いよぼや　―鮭の総ては村上にあり―

いよぼや＝鮭の食文化が色濃く伝承されている。塩引き、酒浸し、醤油はらこ等、いずれも美味である。世界に先駆け母川回帰の性質を見抜き、それを実地に応用した村上藩士青砥武平治の功績はすばらしい。鮭は東日本の代表的な食べ物であり、岩船を含めて新潟県の大部分は東日本型食文化圏に属している。ちなみに、西頸城と佐渡は西日本食文化圏に属しているので、正月にはブリを食べる。

・焼き石料理は先人の知恵　―粟島のわっぱ煮と佐渡の鮎の石焼き―

「わっぱ」という木製容器で煮炊きするという先人の知恵に驚かされるが、現在まで伝承されてきたことにも敬服する。

・産地消費の原則　―ヤナギガレイは日本海の味、タイは西日本の味―

粟島を含めた岩船の海からは、タイ、ノドグロ、ヤナギガレイ、岩がき等の豊かな魚介類が漁獲されており、地元の人々に加えて旅人を楽しませてくれる。

3 郷土意識の形成

講師：板垣 俊一

皆さん、こんにちは。板垣と申します。これから「広域圏に対応した郷土意識の形成は可能か」というテーマでお話します。結論的に申しますと、私としては可能であるというふうに考えておりますので、その方向でこれから述べて行きたいと思います。

図１をご覧下さい。下のほうに、「広域村上市の誕生」と書いてあります。旧村上町から始まって現在の広域村上市に至るまで、「村上」と呼ばれる行政区域が拡大して行くにしたがって、地域のどんな要素が加わって行くかということを段階的に図示したものです。村上は、はじめ武家町と町人町という城下町として形成されたました。それが核になって次第に広域になっていきます。そうしますと、そこにさまざまな文化的、風土的な豊かさが加わっていくことを図示してみたわけです。現在では図の楕円の外側まで埋めて広域村上市ということになるわけです。

この地域がどんな形で、一つのまとまった地域として考えられるんだろうか、ということですが、まず一つはここに磐舟柵（いわふねのき）という、かつての大和朝廷の北の守りを固める砦があったということです。これ以北が今村上市になっております。そして、大和朝廷の勢力が次第に北に伸びていくに連れて、この境界の関所も北のほうへ移動していきますが、平安時代ぐらいになりますと念珠関（ねんじゅのせき）（今の通称「鼠ヶ関（ねずがせき）」です）ができていきます。福島の勿来（なこそのせき）関と白川関とならぶ奥羽三関の一つです。鼠ヶ関はいま山形県に入っておりますけれども、そのほんの手前まで新潟県であります。注目していただきたいのは、広域村上市の境界が、大変古い時代の念珠関（ねんじゅのせき）という越後と出羽の境界にあるんだということなんです。

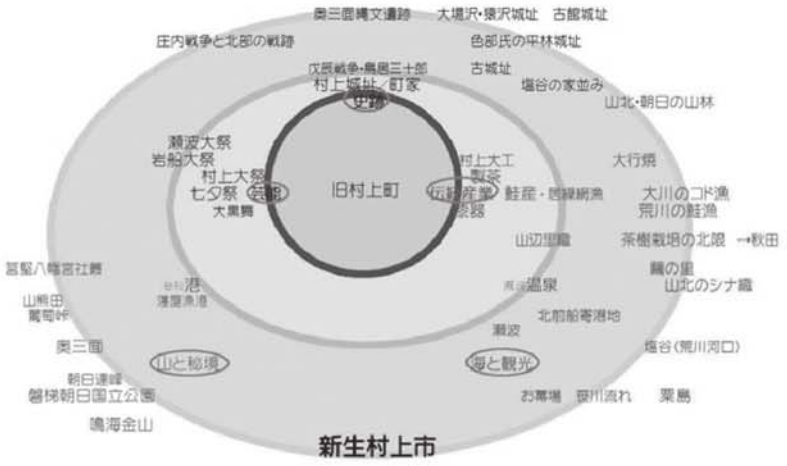

図１　広域村上市の誕生

そういう点で、広域村上市に当たる岩船郡の地域は、大和朝廷の勢力が東北に進展していったことを示す二つの関所の中間に位置しているという地理的な特性があるんです。

もう一つ、こんどは時代が下って戦国の世の話です。越後と言えば上杉ですが、しかし上杉謙信が死んだあとの景勝の時代には、上杉氏は会津に移りそれから米沢に行ってしまいます。村上のお殿様も、江戸時代になりますと、転勤、転勤でぐるぐる代わるわけです。ここで、戦国の時代、ま

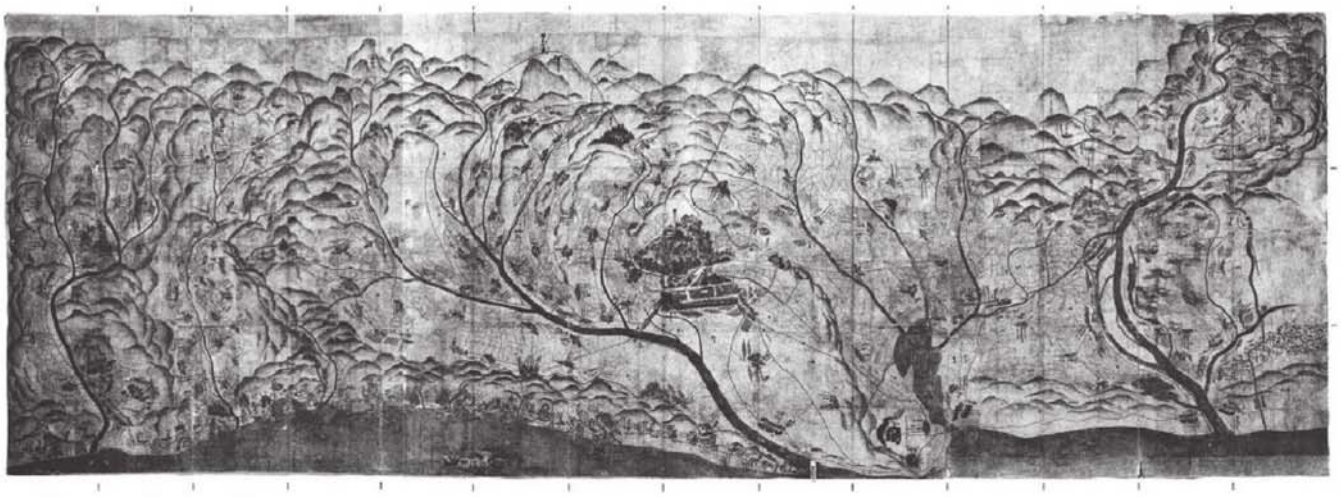

図２　慶長２年　越後国瀬波郡絵図（東京大学史料編纂所編『越後国郡絵図』より）

だ江戸時代になる前の時代を取り上げてみます。

ここに一枚の古地図（図２）を映し出しました。これは、上杉家に保存されていたものです。米沢に原本がある。作られた時代は慶長２年であります。「越後国郡絵図」と名付けられているうちの１枚で、「瀬波郡」と名前が付いています。これは大変貴重な地図であります。ここに、村上のお城が書いてあります。その前後のお城の側を流れているのが三面川です。少し上流で高根川という川が合流します。また、ここに何か湖のようになっているのは、これは岩船のところにあった潟です。もう干拓されて今はない。そして、これが荒川です。川沿いの道を上流にゆくと米沢に至るという川です。荒川、神林辺りから上のほうはぜんぶ山です。左のほうへずっと来まして、葡萄峠を越えてさらに左へ行きますと、こちらにもう一本川が流れています。これが、いま大川と言っている山北の川です。小さい川なんですが大川なんです。大川の、ここに小さなお城が書いてあります。地図の左の端（はし）、ちょうどここのところが、今の山形県との県境になっているんです。

これは四百年ちょっと前の地図です。「瀬波郡」と称していますけれども、この瀬波郡の地図というのが今の広域村上市そのままなんです。つまり戦国期においても、この地域が一つのまとまりを持ってとらえられていたということになります。

この地図の中には、たくさんの地名が書かれていて、歴史の資料としても珍重、大切にされていますが、今の集落が全部入っているんです。また、それぞれの集落の領主に当たる人が書いてあります。誰々の領地だっていうふうに書いてあるんです。大杉とか直江とか鮎川、色部（いろべ）、大川、垂水、池沢、そのほかの領主の名前が、つまり豪族の名前が書いてあります。村上のお城は本庄氏のお城で、本庄氏が一番勢力があったわけであります。けれどもそれぞれ独立性を保った領主たち、つまりいま申し上げたような人々がいまして、例えばその中で、鮎川というような豪族は結構立派なお城を持っていたようで、朝日村に大場澤城というようなお城がありました。今は城跡が残っています。

それから、もう一つ非常に特色のある領主として色部という豪族がいました。平林の辺りにお城を構えていまして、四百年前に年中行事の記録を残しているんです。その中には、正月に臣下が集まったときにはこういうものをご馳走として出すとか、そういうような記録が残っていまして、これは大変貴重な史料になっています。当時の食べ物、食文化を知ることができるような、そんな記録を残している豪族であります。なお本庄氏は、朝日村の猿沢というところにも大きな城を持っていました。

さらにこちらの山北町のほうなんですが、今、古館（ふるだて）と言っているんですけれども、大川氏という豪族の館というのがありました。そういった山城を構えていて、かなり独立性を保っていたんですけれども、結局は上杉氏の支配下に入ってしまいます。

戦国の時代ですから、越後の上杉、甲斐の武田の勢力争いがありました。このあたりも多少は両勢力の代理戦争的なところがあって、庄内のほうとの関係が戦で生じてくるんです。本庄氏なんかは、かなり後々まで上杉氏に従わなかったと言われています。でも結局、上杉氏の領地になって、上杉が越後から会津に移されますと、その辺の豪族たちも一緒についていってしまいます。その後、村上には別のお殿様が入って、代々城下町として発展していくということになるわけです。

このように戦国期には、この地域というのは、結構、独立性を持った地域だったようで、簡単に武田信玄も上杉謙信も自分の領土にできなかった。村上にも本庄氏が頑張っているわけです。本庄氏のお城を上杉謙信が自ら来て囲んだのだけれども、簡単には落城しなかったというようなこともあります。

それから、もう一つこの地域の特色として言えることがあります。戦国時代、上杉氏がなぜあんなに力を持ったのか。その一つの理由として、財力、お金があったのだろうと考えられます。お金は何か？　当時としては金（きん）です。「黄金」とか「砂金」です。越後で金（きん）と言えば佐渡金山が有名です

が、もっと古くはこの広域村上市での金の生産がかなり多かったのではないかと言われています。上杉氏の財力のためにもこの地は魅力的だったのでしょう。実際に、その遺跡として鳴海金山というのがあります。

図3を見てください。これは、村上市の郷土研究グループのみなさんが1973年に模写した図なんです。先ほどの本庄氏ですが、北海道に子孫がいて、そこにこういう地図があるということを探り出したらしいのです。

忠実に写したものなんですけれども、先ほどの上杉家の大きな絵とだいたい重なります。この地図で面白いのは、地図のこの辺に高根金山と書いてあるところ、それからもう一つ、この辺に、本山金山という名前が出てくるところです。金山が二つ書かれています。ここからかなり金が取れたらしくて、ちょっとオーバーな言い方をしますと、今日の広域村上市の地区は黄金の地でもあったということになります。

これらの金山は山奥にあります。例えば鳴海金山は、いま朝日スーパー林道が通っていますが、冬になると行けないほどの山奥です。そういうところは秘境と言われます。今はダムに沈んだ奥三面も「秘境」と言われました。

こちらのほうに行きましょう。山北のほうなんですが、ここにも秘境があります。先ほどの話にも出てきました山熊田という、何か恐ろしそうな地名があるんです。ここにも全国に数ある平家の落人伝説があります。藍(あい)の沢というところに、どこかの武将が落ちてきまして、まず鳴海金山を発見したというのです。それからさらにもっといい金山があるんではないかと言って、山熊田の奥へ行ったら、本山金山というもう一つのいい金山があったというわけです。そこで、そこに定住したのですが、豪族大川氏に滅ぼされてしまった、と伝説では語られています。これは史実ではなくて、伝説なんですけれども。上杉氏がどうしてもこの地を手に入れたかったのは、この地で金が取れたということでしょう。それで山形のほうにいる豪族と常に、戦い、抗争の地になってきたわけであります。もちろん先ほどの三つのルートを通じて一般の人々の交流もあったわけで、山形方面との関係というのは、文化的にも大変強いものがありまして、特にここへ来ますと山形の文化っていうのがかなり入っております。

私の話の主旨は、今日では城下町村上というような宣伝で全国に通っていますけれども、歴史的な関心をもうちょっと広げることで、さらに魅力が増すんじゃないかということなんです。本庄氏の時代まで遡ったときに、この辺一帯が一つだったというふうに、広域性を持っているということが言えるんじゃないかということなんです。

そしてまた史実を考えるにも、そういった周辺地域を併せて考えると面白くなるということです。例えば、さらに時代が下って明治維新に戊辰戦争がありました。このへんも戦場になったわけであります。村上藩の最後の家老鳥居三十郎が鼠ヶ関方面まで行って戦いました。小さいながらも戊辰戦争の戦跡が山形の庄内藩との間の戦跡として広域村上市に広がっているわけです。鳥居三十郎という村上藩の最後の家老は、出かけていって戦死するんです。戊辰戦争で犠牲になったという人たちの伝えは、山北町のほうに行きますと出羽街道沿いでよく語られています。そういう点でも、一つの歴史的な広がりというものを持っているということであります。

もう時間になりましたが、このほかに生業面でも、お茶は確かに旧村上市の名産になっていますが、お茶の栽培そのものはもしかしたら、庶民が飲む自家製のものとしてはもうちょっと広い範囲で作られていたんではないかという気がします。また伝統産業の堆朱も漆を使うわけです。樹液の漆というのは山あるいは畑で栽培して採取されるわけです。この漆の生産というのは朝日地区、山北地区辺りでかつてはたくさん行われていました。そういう原料の供給の支えというものがあって成り立っている、というような関連性もあるわけで、その点で伝統産業も広域性を持っているということが言るんじゃないでしょうか。

このようなさまざまな観点から広域村上市の新しい郷土意識形成を考えることが可能であるということを結論にして、私の話を終わりたいと思います。

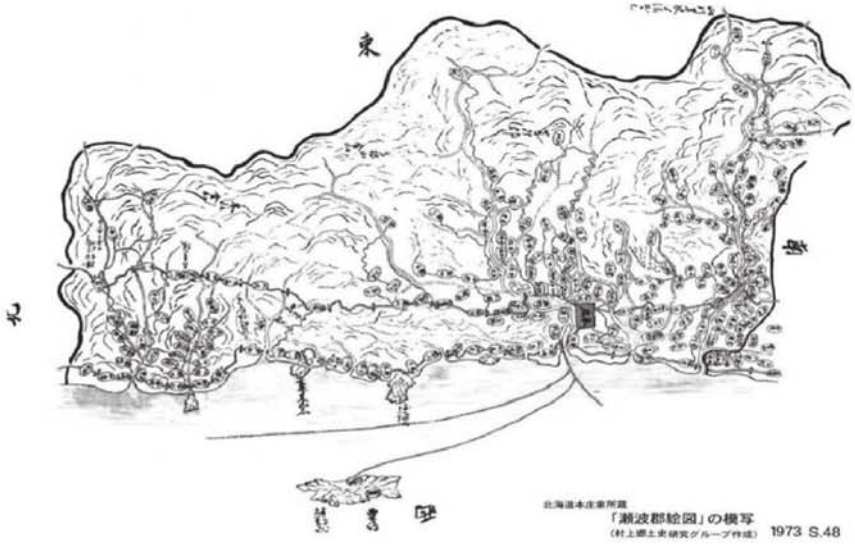

図3　北海道本庄家所蔵「瀬波郡絵図」(村上郷土研究グループ作成)

意見交換「村上・岩船の再発見に向けて」

木佐木　まず、コメンテーターの福嶋先生から、特に長谷川先生のご講演に対してということでお願いいたします。

福嶋　私の専門は言語学で、特に方言を研究対象にしています。新潟の生え抜きではありません。広島から来ました。ある意味、よそ者が見ると方言がよくわかる、そういう側面もあります。私も長谷川先生と同じ新潟県ことばの会に入っていますので、その大先輩のお話を伺って、県立大の前身の女子短大の学生の方言を研究した私の資料もお見せしてお話をしたいと思います。村上・岩船のふるさと言葉というものが日本のふるさとの歴史文化の生き証人であるというのが、長谷川先生のお話の結論になっていました。私もまさにその通りだと思いますが、その方言、ふるさと言葉に対する認識というものが、昔と今では随分変わってきています。昔は、方言というものは、標準語に比べて、劣ったもの、間違ったもの、というように考える見方がありました。前に長谷川先生のお話を伺ったときに、村上の町にあった２つの小学校で、言葉が実は違っていて、ズーズー弁を話す小学校では、その発音をなおす教育が行われたそうです。ですが現在、方言と共通語を場所によって使い分けるという時代に入ってくる中で、今は方言を楽しむ時代に入ってきてるんだと思います。そういう目で見ると、ふるさと言葉の中に、日本語の歴史なり、文化というものの片りんが見えてきてるのかな、というふうに思います。まさにその方言の中に、古い言葉、古語が残っていたり、発音が残っていたり、文法が残っていたり、ということになります。ただ、その方言というものは、古いものが残っているという側面ばかりではなく、新しい変化というものもあります。方言そのものは生きていますから、変わってきているということです。それから、長谷川先生のお話の中に、この村上・岩船の方言の地域の中でも共通性とともに多様性もあるという話が出てきました。例えば、村上町とその周辺とでは発音が違う、という話がありましたし、そういうものと、あとで食文化のほうで出てきた地域差というようなものとも共通性があるのではないかなと思います。

時間がないので一部だけこの時間にお見せしようと思うのですが、これは方言文法全国地図というものの中から新潟県のデータだけを使って地図化したものです。「雨が降っているから」というのを新潟では（村上も含めて）「雨が降ってるスケ」というわけですけれども、その中でも、岩船で特徴的なのは、山北と粟島で「ッセ」って言うんですね。「雨が降ってるッセ」っていうふうな形で、ッセの前の言い方がちょっと違うかもしれませんが。それがですね、今、短大生ではどうなってるかを見てみますと、「スケ」というのが全県的にあったものがかなり姿を消して、「ッケ」「暑いッケ」っていうような言い方ですね、そういうものに変わってきてるということになります。残念ながら、たまたま私が調査したときに出身の学生がいなかったために短大生のデータに一番問題の粟島と山北の情報がないので、比較はできないんですけれども、もしかしたらそこにだけ「ッセ」が残っていたかもしれない。例えば、ちょっと西の端を見ていただきたいんですけど、糸魚川のところにですね、糸魚川、青海（おうみ）ですけれども、「ソイ」というのが赤い印です。ですから、短大生も「暑いソイ」っていう言い方をするらしいですね。そこで、前の地図に戻るとですね、見事にお年寄りの言葉の中に「ソイ」とか「ソエ」があるわけですね。ですから、例えばこの中で一つ「スケ」から「ッケ」というつまる音（促音）への変化が岩船でも起きているんですけども、もしかしたら、「ッセ」っていうのも、調べれば若い人にも残っている可能性もあるのかな、っていうふうに思ったりもしています。

岩船という地域の中は、阿賀北で東北地方につながり、そして一方で、コータ（買った）が使われているように関西方言の影響も受けているという意味で、東西の言葉の影響があるというところの共通性があるわけですが、その地域の中でも例えば今見てきた、村上町の言葉とか、あるいは山北、粟島辺りの言葉があり、それから別の地図では、関川辺りの言葉がやはり山形から直接入ってきた言葉の変化を示している地図もあったりします。非常に統一性と多様性が共存する地域なのかなと思います。

木佐木　長谷川先生に会場から。村上に来てまだ２年ですけれども、年配の方のお言葉で「しゃがしゃが」とか「えいえい」という相づち、あるいは「んだか」というような言葉があるように思います。その意味について、もしおわかりでしたら教えていただきたい、ということです。

長谷川　老人の「えいえいえい」という相づち言葉ですが、どういう場面で使われてたのをお聞きになったかよくわかりませんけども、「えいえい」というのは「そうですか」という意味です。

会場１　「えいえい」という言葉を老人さんたち、すごく頻繁に使うわけです。相づちだとは思うんですけども、ここの地区独特の言葉でしょうか？　そこの辺をちょっと教えていただきたい。

長谷川　言葉であるような言葉でないような形なんですけども。使っている場面の前後の関係で判断すればよい話で、普通には「えいえいえい」というのは「そうですか」という意味なんです。

長谷川　それから、「しゃがしゃが」。これはどういうときに使っているのか知りませんが、「しゃがしゃがしてる」というのは、病気などをして、弱々しく見えるときの一つの形容する言葉です。

会場１　「あそこのばあちゃんはしゃがしゃがしてきたんだ」とか、そういう言葉

が多いんですけれども、つまり自分は大したことないけれども、相手はちょっと弱ってきたんだと、そういう意味合いは含まれていますか？

長谷川　いや、自分との比較じゃないんです。あくまでも、相手のその方がしゃがしゃがしてるわけです。しゃがしゃがしてるってのは、われわれも使う言葉ですけども、弱々しく見える、か弱く見える。例えば、太ってる人に対し、やせた人が「しゃがしゃがしてる」、そういう感じです。

会場１　病気になったことも「しゃがしゃが」ですか？

長谷川　病気になったときも。しゃが、しゃわついているっていうことです。

会場１　例えば、老人になってきたのも。

長谷川　そうです。年を取れば誰でも弱々しくなりますから。しゃがしゃがしてくるわけです。だけど、病気になってもしゃがしゃがします、ということです。

木佐木　続いて佐藤先生から本間先生に対して。

佐藤　鮭文化と鮭料理という視点から、本間先生にお答えいただけたらと思います。鮭料理はほんとに丸ごと全部余すところなく食べているから、飯ずしからいろいろありますけれども、そのおいしい理由としまして、先ほど先生おっしゃった気候風土のところで、もし首を下にしてつるすっていうのはやっぱり村上の皆さまの鮭に対する思い入れもあるかと思いますが、風土、気候的な問題で何かこう北風の風通しのよいところにつるすとか、新潟よりもうちょっとほどよい気候風土が適している。それから２番目は、「のっぺ」についてなんですけれども、村上のほうは「だいかい」と呼んで、新潟の蒲原では「のっぺ」と言います。里いもを使いますが、その「だいかい」の中でも、食材によって違ってくる、材料が変わってくる。そして、切り方も、短冊切りとか、鮭の腹が入る、報じは油揚げが入り三角形とか、千切りとかっていうのも聞いてますが、もしその辺も何か先生おわかりでしたらお願いします。３番目は、「アクちまき」。山北のほうでは食べられて、その後は、南のほうには下がってこない、その文化圏のラインみたいなのがあるのかどうか。それから、「かきのもと」。山形の庄内では「もってのほか」、秋田も「もってのほか」、下越で「かきのもと」、そして中越で「おもいのほか」と言って、上越になるとまた「かきのもと」というように、中越が飛んでいるような気がしますが、下越と上越と似ているのかなど。よろしくお願いします。

木佐木　それと、本間先生に「食文化的には庄内は隣接しており、もっと村上地域と似通ってもよいと思われますが、実際には庄内、鶴岡圏の食文化は村上圏よりはるかに多様で豊かである。この違いは、葡萄峠の存在が挙げられるとありましたけれども、出羽街道を通した交易・交流はどのようなものがあったか教えていただきたい」ということです。もう１点、「料理の味、みそやしょうゆの薄味、濃い味、だしの味等もフォッサマグナの境界で分かれているのではないでしょうか？　何かわかることがあれば教えていただきたい」ということです。３つ目、「『のっぺ』と『だいかい』『たいかい』のいわれ、また、違いを教えていただきたい」ということです。

本間　いくつか質問がありましたが、「だいかい」の話、「だいかい」か「たいかい」、どちらですか？　一番多いのは？

会場２　だいかい。

本間　だいかいが多い。それじゃ皆さん、語源はご存じかと思いますけど、大きな弁当というような、容器です。なぜ村上にその言葉が定着して、ほかでは、私が調べた限りではあったことないんです。たぶん昔は、城下町なんかだとよく言われるんですけど、たくさんごちそうを出しすぎると、要するに皿数が多すぎると怒られるので、宴会の真ん中に大きな容器を置いて、そしてみんなで皿に盛ってあげる。皿数は特に増えないから、というようなやり方が定着した、という話があります。それから食文化的に庄内との関係。共通している面がありますけれども、やっぱり特に鮭の文化については、こちらのほうが卓越している。それからお米については、例えばコシヒカリの親の親ぐらいになるんですが、亀の尾というのは庄内で生まれた品種です。それが新潟へ来て、いろいろ使われているというようなことがありますし。それから、枝豆、黒崎茶豆、おそらく庄内から来た、だだちゃ豆の子孫じゃないかという説もあります。ナスについてもそういうことはありまして、そういう面から見ると、案外、向こうのほうが進んでいたのではないかということです。庄内のほうが藩がわりあいに安定していた。政治がうまくいってた。そういうことで、食文化的にも安定していた。村上は残念ながら、ちょいちょいと変わったというようなこともあったかな、と思います。ただ、大きく見ると、村上を含む新潟県の下越地方と庄内というのは本当によく似てます。食文化的には、ほとんど同じ双子であると言ってよろしい。質問用紙に書いてあります、「交易にどの程度影響したと考えられますか」ということですけど、それほど大きな影響はないけど、ちょっとした細かいことで影響してきた、その表れが例えば、「アクちまき」や食用菊の名前の付け方、これは案外、交流関係よりもっと微妙な名前の分布があるようです。それから、「料理の味の薄味、濃い味、だしの味も、フォッサマグナの境界で分かれているんでしょうか？」ということですけど、大まかに言えば分かれていると言っていいと思いますけれども、そんなに絵に描いたようにいかないっていうことです。ただフォッサマグナ辺りから西のほう、東のほう、っていうのはいろいろなもので分かれている。例えば、しょうゆは西のほうに行くと薄味になる。色は薄くなる。みそもあまり使わなくなるということもあります。ただし、フォッサマグナは何千万年前の話で、人類が生まれたのは数十万年ぐらいで、そういうフォッサマグナの話と食文化の話はまったく関係ないんですけど、なぜか一緒になってそこから分かれているということでフォッサマグナ、フォッサマグナとよく言われている。そういうことではないかと思います。

木佐木　私は板垣先生のご意見に対応した「郷土意識の形成は可能か」というようなことについて、少しコメントさせていただきたいと思います。歴史的ないわゆる村上・岩船というこのエリアを文化圏として、あるいは何らかの個性を持った、特性を持ったエリアとして取り上げるというのは、板垣先生からいろいろ説明していただきました歴史的根拠があるというのは明らかだと思いますし、あとは地理的にも川であったり山であったり、蒲原、あるいは山形との境界というのは、ある程度わかるんじゃないかというような気はします。これは質問ということになると思いますが、村上町を中心とした広域圏が、伝統産業やさまざまな観点から、人やものやさまざまなものが村上に集まってくるというのはよくわかりました。その一方で、広域圏を形成するためには、逆の流れといいますか、村上のほうから朝日であるとか山北、神林、荒川のほうへの流れ、物流だけではなくて、通婚はどうだったんだろうかとか、もしおわかりであれば、お答えいただければと思います。それから、板垣先生に会場から質問をいただきましたので、その質問にもお答えいただければと思います。「『磐舟（いわふね）の柵』は聞いたことがありますが、今の村上ふれあいセンターの付近の山の地名に『しなのき』というところがございます。信濃国（しなのくに）、越国（えつのくに）から来たということが文献に見えるのですが、『しなの柵』とも考えられるのですか？　わかりましたら教えてください」、それと「本庄の前に村上という地名があったようですが、わかったら教えてください」ということです。

板垣　「き」というのが、磐舟柵（いわふねのき）という場合にはまさにとりでなわけです。「しなのき」の「き」が果たしてそれなのか。漢字を当てるとどうなのかっていうのはよくわかりませんけれども。「シナの木」という木があります山手の木ですが、それとは無関係なのか、よくわかりません。ちなみに、信濃との関係、越の関係という点で、注目されるのは、白山修験という山伏です。新潟辺りにも、石動（いするぎ）という地名がありまして、越前として能登の石動というような山伏の修行の山、そのような人々の流れが月山（がっさん）辺りまであったのではないかと思っております。それから、本庄という地名、本庄というお殿様が出てきましたけれども、その前に、村上という地名があったのではないかというお尋ねですが、あったかどうかってわからなくて、教えてもらいたいところなんです。私の認識では、最初の大名として村上に来たのが村上氏、すぐその後、堀氏になるんですけれども。

長谷川　なぜ村上という地名になったかというのは、板垣先生がおっしゃったように、確かに村上氏が来てからなんとなくこの村上になったんです。ところが、本庄を調べていくと、その前に村上というのがちょいちょい出てきてる、ということがわかってきたんです。ところが昭和６年だと思いますけど、村上郷土史というのが、本町の人たちが作った歴史書なんです。ここには、村上氏が来て村上になったっていうことが書いてあります。過去に、村上頼勝さんが来る前に、村上という地名は出てきている、本庄に。それからもうちょっと大事なことは、江戸時代以降に、大名が移ってきて大名の名字が地名になるっていうことは、日本にはまずないんです。大名が、あるいは豪族が地名を名乗るというのは、それが普通なんです。ここになぜ本庄氏がいるかっていうと、村上の、これは小泉の庄っていうんですけども、先生のところの庄内は大泉の庄、こっちは小泉の庄、と。小泉の庄の中に２つに分かれるんです。で、本庄、もともとの小泉の庄と加納の庄、これは神納（かんのう）なんですけど、今の、神納というのは加納の庄の加納が訛（なま）って神納になってるんです。そこを、しっかりしなきゃならないんですけども、神様とはまったく関係ない。で、その加納の庄にいたのは色部（いろべ）さんなんです。色部さんはなんで色部を名乗ってるかっていうと、加納の庄の中に色部というところがあったというふうに考えなくちゃならないんですが、それはどこかっていうと、大体、牧目（まきのめ）のところなんです。あそこに小色部（こいろべ）という、小さい地名が今でも残ってるわけですから、ここに最初いた、ここを領有したのが色部氏のもともとの姿である、というふうに考えられるわけです。

木佐木　続けて。どなたかおわかりであればということで、「新潟から村上までの河川の舟運、内水面交通の様子について、おわかりであれば」。もう一つ「塩津潟、『しょんづがた』の由来について。塩の道、塩町、塩谷、塩野町、たんぼぼの塩作りと関連して教えていただきたい」。

板垣　確かに塩の道っていうのは、糸魚川の塩の道だけではなくて、内陸との交通のあるところには、特に北前船で、塩をこっちからあるいは北海道からその物産を運んでいった帰りに、塩を持ってきたりというような点で、荒川辺りもそこから米沢のほうに塩が運ばれたということは当然考えられますし、ある面では塩の道だったと考えていいと思います。これは、阿賀野川がそうでありまして、阿賀野川から会津のほうにたくさんの塩が運ばれているんです。それから、山北産の塩作りとありますのは、これは、かつては山から出す木材で、こっちは焼いて煮詰めて塩を作るという製塩法ですから、木を燃やさなければなりません。その木材は、山から出して、海岸で塩炊きをしたということは確かにありました。それよりも本当は、瀬戸内海のほうのたくさんの塩が入ってきたと思いますけれども、貴重品でありますから、地元でもそういったことをしました。で、塩谷はそういう点で舟で行くと、それから内陸方面への入り口であったという点で、別ですけれども、塩野町、それから塩町というと村上でしょうか。これ、職人町との関係があるものと思います。塩野町は出羽街道沿いの宿場になりますけれども、これなぜ塩野町かっていうのは、ちょっと私はわかりません。関連して長谷川先生のほうで何かご説明があればと思いますけど。

長谷川　塩野町がなぜ塩の町かって、よく

わからない。わからないけれども、海辺で塩を作るんです。塩炊きをやる。瀬戸内海から入ってきますけれども、これはあとの時代で、やっぱり自分のところで塩を作るんです。そうすると、塩野町辺りの朝日村の人たちは、どうしてもその海辺の塩を買わなきゃならない、さらに山越えで来るんです。だから、ある意味ではそれは小さい塩の道です。人間、塩がなけりゃ生きていけないんですから、絶対必要なんです。それが集積されて出たところが塩の町である、かもしれない。これ、わかりませんが、そういう可能性も十分あります。それからもう一つ、塩は、方言に、「しおになる」っていう言葉があるんです。「しおれる」っていう言葉もあるでしょ。しおれるっていうのは、枯れそうになる。「しおになる」っていうのは、ものが終わりになるんです。だんだん細くなっていって、野菜なんか作っても、終わりになってしまうでしょ。塩野町というのは越後平野のが細くなってきて、そこから葡萄峠じゃないですか。ですから地形的にいって、あそこは「しおになってる」んですよ。人間の生活からすると、海辺の塩が必ずあそこに入ってきて、あそこにみんなが買いにいって、そこに道ができて、それで町ができて塩野町というふうに名前がついた、そういう可能性も十分あります。

会場３　塩津潟を質問した者です。「しょんづがた」というのは、塩津潟の塩と津の間に小さな「ん」が入ります。「しょんづがた」と「しうんじがた」は、同じ意味です。塩津潟を紫雲寺潟と言っているけど。殆どの公文書や市町村史は塩津潟になっています。「塩の道」があったので、塩津潟だと言う。新潟地名学会の長谷川勲氏は、塩津潟について、新潟日報に書いています。そういう観点からすると、村上藩と塩津潟は非常に深い縁がある。にもかかわらず、村上市の人々はほとんど知らない。新発田藩が領有する以前は、150年間村上藩の領地になっていた。塩津潟周辺の言葉は村上弁が多いです。そういうことから考えると、もう少し村上市の人々は、塩津潟と言ったほうがいいと思います。なぜかと言うと、さっき河川舟運を話したのは、塩津潟北辺の築地から堀川を広げて、村上城まで作っていまです。村上藩の大きな事業でした。新潟湊から塩津までは、河川舟運がありました。塩津潟から村上のお城まで内水面交通（河川舟運）で物流していました。そのことを村上市民は知らないし、また言わない。塩津潟と言われる時代は、村上藩が領有していたはずなのです。紫雲寺潟なんて言われる前から、塩津潟なのです。私は、古絵図から塩津潟になっていると考えています。もう一点は、さっき「岩船潟の干拓」という話をしましたが、「塩津潟の干拓」を村上藩もやっていた。だから「塩津潟の干拓」と呼んでも良いと思います。村上藩は、岩船潟や塩津潟も領地の時代があります。村上藩の領地は、もっと南にもあります。蒲原平野の「潟」は、殆ど干拓しているのでもう少し新潟県の歴史を正しく理解してほしい。吉田東伍博士によれば、著書『大日本地名辞書』に「紫雲寺潟は塩津潟の転」と書いてあります。塩津潟のパクリになっています。私は「村上藩の塩津潟干拓」を、村上市の児童・生徒に教育の場面で教えても良いかと思います。本日、塩津潟の質問をした理由は、県立大学の学生に「塩津潟の由来」を調べてもらいたいと思ったからです。人から聞いて、「塩津潟と言うとダメ！　紫雲寺潟と言わないとダメ！」なんて人の意見を聞いて「はい、そうですか」なんて学生じゃダメだと思うので、塩津潟の質問をしました。

福嶋　紫雲寺が実は塩津だったのではないかっていう話は、たまたまあるところで私の夫が、あの辺りの干拓の話をしまして、その場に長谷川先生がいらっしゃいまして、長谷川先生は、実は紫雲寺、「しお~ず」というのは塩津であるということをおっしゃっていたのを覚えております。機会があれば、このことを学生たちにしっかり伝えていきたいと思います。

板垣　出羽街道と村上のほうからの物資の影響というのはないのかということなんですけれども、当然、例えば岩船で作られた麩（ふ）が運ばれていくとか、四季の製品を村上から集散したということはあったわけです。原料としては、例えば漆のようなものや木材が入ってくるということはあったわけで、そこここの流れがあったと考えられます。それから出羽街道では人だけではなくて、かつては物資が馬の背に乗せられて運ばれていったということがあったわけです。例えば、その出羽街道沿いの村では、一つの換金作物として、麻を栽培して、それを関西地方にこの出羽街道に沿って出して、途中で船便になるんでしょうけれども、そういったことも実際に行われていたということを聞いております。

木佐木　長谷川先生から、方言を単なる発音であったり、言葉の違いということではなくて、その奥に潜む意味なり、歴史なりみたいなことが方言から見えるという話を頂いたことはとてもありがたいと思いました。もう一つは、新潟、特に村上はそうなのかもしれませんけれども、本間先生の話にもありましたが、非常に食材が豊富だと。米がうまい上に、鮭があって、それで山菜もあれば、海も近い、川もある、里山もある。交通の便という意味では、のっぺらな平野を行くよりはいろいろ大変でしょうけれども、食に限らず、風土っていうのが多様で、３人の先生方の話を聞いても、村上・岩船というところの新しい共通項というかくくりはあると思います。いろんな意味で、非常に多様性があるというのが、たぶんキーワードじゃないかなと。私は鹿児島出身ですので、鹿児島だと例えば藩一つ取ってもずっと島津ですし、鹿児島なんかの場合、特に米が非常に少ない。私の記憶での田んぼの風景っていうのとは異なり、新潟のそれはもう驚くべき風景なんですね。村上、広域村上、関川や粟島も入れて、村上・岩船、やっぱり多様性っていうのが大変重要なキーワードじゃないかなということで、つたない閉じ方ですけれども、長い時間ありがとうございました。